

日韓国際結婚家庭の子供の継承語教育

－韓国が多文化政策と日本人親の継承意識の変化－

LD072002 李尚美

【要旨】

韓国は、長い間、単一民族単一言語社会を標榜していたが、1990年代に入って外国人労働者が入国し始め、2000年以降、アジアからの女性と韓国人男性との国際結婚家庭が急増し、多文化政策を整備し、国際結婚家庭で生まれた子供たちの言語問題について様々な議論がなされている。本研究は国際結婚家庭の子供の言語継承に注目している。国際結婚家庭の子供のルーツとなる言語や文化を育てることは多文化社会における人権の上でも多様な人的資源を確保という側面からも推進されるべきである。

継承語教育を行う上で家庭の中で親は継承語をどう意味づけているか、社会やコミュニティはそれをどうサポートしているかを韓国に居住する日韓国際結婚家庭の親を対象に調査を行った。日韓国際結婚家庭の日本語継承は家庭の努力のみに頼ってきており、日本語の補習校がなく、日本語環境の確保は難しかった。韓国内では日本語で学校教育を受けることが難しく、多文化政策による継承語教室にも多くは期待できないことから、国際結婚家庭の主体である母親が自らコミュニティを形成して同じ境遇の人々が集まり、情報交換、子供の日本語環境の確保する場としてコミュニティを作ろうとする動きがでてきた。今までの研究では韓国における日韓国際結婚家庭のコミュニティに注目した研究はなく、このようなコミュニティの形成が継承語教育の一つの可能性であると考え、コミュニティの役割について関心を持つことになった。日韓国際結婚家庭の母親たちが子供たちの日本語の環境の確保のために自らがコミュニティを組織し、運営していく過程を分析し、考察することは今後の多文化家庭の継承語教育の方向性や政策の転換に寄与できるものであると思われる。

まず、序章では本研究の研究背景と目的、定量調査と質的調査の概要、論文の構成を述べ、本研究で用いられる用語の整理をした。第1章では先行研究として国際結婚家庭における継承語教育、国際結婚家庭の子供のバイリンガリズム、今までの日系国際児の日本語継承に関する研究について検討した。Landury&Allard(1992)の巨視的モデルを参考にし、韓国に居住する日韓国際結婚家庭の日本語継承を「社会レベル」「社会心理レベル」の要因を中心に分析する。継承語教育は親の選択によって始まり、親の選択は家庭内における言語使用として表れる。親の意識はその言語に対する社会の評価と継承語教育を社会がどのようにサポートするかによって形成されると思われる。そして、継承コミュニティの有無やその活力が親や子供の継承語教育促進する一要因であることを踏まえ、本研究では韓国社会における日韓国際結婚家庭の「家庭」、「社会における政策のサポート」、「日本人コミュニティ」を軸とし、国際結婚家庭の子供の継承語教育にそれらがどのような影響を与えるかを明らかにする。日韓国際結婚家庭の継承語研究はまだ蓄積が浅いが、今まで明らか

になっている日本語継承の成功要因としては、「親の積極的な姿勢」、「韓国内における日本語の高い地位」、「政府の政策支援」、「夫婦間の教育観の一致」などが挙げられている。更に、韓国における多文化家庭の形成過程や韓国社会の受容について先行研究を検討した。一般に多文化家庭の子供の教育問題は、学校への不適応、言語能力不足など問題として扱われてきたが、外国人親の母語による子育ての重要性や社会の言語資源として多文化家庭の子供の二重言語教育の重要性に関心が高まっている。

第2章では韓国における国際結婚の全体像、日韓国際結婚家庭数の推移、日韓国際結婚家庭の多様性、国籍法の改定、韓国における日韓国際結婚家庭の歴史などについて述べた。日韓国際結婚家庭は韓国における多文化家庭と形成背景が異なり、韓国に中長期居住している。日韓国際結婚家庭の数は韓国全体の中では約4%と少ないものの、その歴史は植民地時代の内戦結婚から、宗教による合同結婚、2000年以降は語学留学や仕事などで海外に滞在中に出会うケースまで日韓国際結婚家族の属性は多様化していることが明らかになった。

第3章の第1節では、韓国における外国人政策の流れを追い、在韓外国人処遇基本法、多文化家庭支援法の概要を紹介し、多文化家庭の定義、多文化家庭の子供の多言語教育支援について論じた。多文化家庭の親や子供は韓国語や韓国文化の知識が不足し、韓国語能力が低いため学業不振に陥っていると考えられている。学校のカリキュラムの中で多文化家庭の親の文化が疎外されていること、また多文化家庭の支援として多文化家庭の子供が学校で特別な待遇を受けていることが問題視されている。そして、継承語支援に対して選択的、戦略的にバイリンガル人材の育成を目指しているが、弱小言語まですべての言語において結婚移住者の親の母語や継承語で保育する権利、その子供が継承語を学ぶ機会を得る機会が提供されていないことが問題として挙げられた。第2節では多文化家庭の子供のために実施されている二重言語教育を概観した。具体的には「二重言語教師養成プログラム」「多文化センターによる多言語教育」「多文化図書館：モデュ」「Save the Children」「女性家族部：多々多キャンペーン、二重言語家族環境助成事業」について論じた。

第4章では韓国に居住する日韓国際結婚家庭を対象として調査を行い、家庭内の言語使用を把握し、父母の「言語継承に関する意識」、「教育志向」、「社会文化志向」の3つの項目に分け分析を行った。本研究に協力した日韓国際結婚家庭は、子どものバイリンガル教育を強く支持し、夫婦の使用言語は主に韓国語であるが、日本語話者の親が子供への日本語使用に積極的であり、「日本語のみ」、「日本語と韓国語との混合使用」を合わせると、64%と高い数値を表している。継承語教育の成功要因としては、「日本語の有用性」、「日本語学習への周囲の肯定」、「親の積極的な姿勢」が挙げられる。協力者は、日本語の継承が与える子供の将来や学習へプラス要因となると判断し、周囲の家族も日本語の習得を肯定的に捉えている。反面、障害要因としては、社会との相互作用によって形成される心理的要因が言語継承を制限していることが明らかになった。異質性への開示の拒否として公共の場で日本語使用を躊躇すること、一部ではあるが同居する親世代の否定的な態度は、言語継

承を厳しくする環境である。日韓国際結婚家庭の子供は、韓国語優位の中、全体の47%が日本語で「話す、聞く、読み書き」ができるレベルに達している。言語文化意識調査では、モノリンガル家族とバイリンガル家族の日本語継承について意識の差が表れた。モノリンガル家族は日本語継承を教育的側面から捉え、「子供がバイリンガルになることは、学校の勉強にプラスになる」という項目への肯定度が高く、バイリンガル家族の親は、「日本語」を家族の繋がりを強化する情緒的なものとして認識し、家庭内における二言語使用は、言語とその言語を背景としている文化の習慣が家庭で共存するバイカルチュラル志向として表れた。そして、居住地である韓国の教育に対して、モノリンガル家族より韓国の教育システムを批判的に捉えている。子供への日本語を継承は、子供が将来、韓国以外で教育受ける可能性の拡大を想定しての選択であると思われる。

第5章では日韓国際結婚家庭の継承語グループ「ソウル友の会」と「あいあい」の結成経緯、活用内容、日本語継承の活動について論じた。

第6章では、「日韓国際結婚家庭における日本語の継承」について日本人コミュニティ（あいあい、友の会）に参加している人を対象に「親は日本語継承をどう意味づけ、コミュニティへの参加、多文化政策の実施と親の意識がどのように相互作用をしているか」について質的調査をした。M-GTAを用いた質的分析結果として、韓国人と国際結婚をして韓国に居住する日本人母親は子供に継承語を継承させたいと考え、子供を日韓バイリンガルにしたいという強い期待が存在し、高い日本語力を望んでいる。家族の中は「多言語が共存する」状態であり「夫のサポート」が得られ親族もバイリンガルを肯定的に評価している。しかし、両言語の発達、日本語を維持できるか、兄弟の差はどうするかなどの不安も同時に存在する。なぜ日本語を継承したいかについては、子供と繋がりたい、母親自身の文化資産の継承が挙げられた。子供には日本語を「自然なもの、子供の意志を尊重して、楽しみとして」伝えることを心がけている。継承語として日本語を習得させるために母親たちは【意識的に日本語継承に取り組む】。母親による「家庭内の継承語教育の実践」行う上で同じ日韓国際結婚家庭の「自主的コミュニティの活動」は母親の継承語習得への意欲を強化している。[自主的コミュニティ活動]により子供と母親両方の日本語を話す場として「日本語環境が確保」され、そして、日韓国際結婚家庭に特化した「生活や育児情報を共有」することができるようになる。一方、韓国で継承語教育を行う上で障害要因として「子供の学習への負担、日本人に対する否定的な視線」などが挙げられた。韓国の多文化政策の実施により、外国人に対する韓国人の認識は変化しつつあるが制度の変化の速度に追いついていないのが現状である。しかし、日本人母親は個人的韓国人との付き合いには寛容的、親密感を示している。多文化政策により日本人コミュニティの施設の提供といった肯定的側面も見られたが、日本人の母親が求めているニーズと多文化政策のプログラムの内容には乖離があり、積極的に参加している母親はいなかった。

コミュニティ活動は継承語の教育的目的に留まらず母親の多様な変化をもたらした。大きく[自己向上]、[繋がりへの拡大]、[柔軟な態度]のサブカテゴリーにまとめられ、[自己向

上]には〈刺激と励みを得る〉、〈母役割の多様化〉、〈不安やストレスの解除〉という概念が含まれた。[繋がり拡大]には〈韓国社会との関わり〉、〈同じ境遇の子供の繋がり〉が含まれた。コミュニティへの参加によって母親は日韓国際結婚家庭の母親と交流し、韓国についての情報や経験談を聞き、共有することによって日本語や日本文化のみを強く主張するのではなく、時間の経過と共に[柔軟な態度]を示していることが明らかになった。言語使用においても相手の人、場の雰囲気を考え〈配慮と調整〉を行い、〈歴史や外交問題に関して子供に多角的な意見を提示〉している。子供の将来については「自立した、自由に、日韓の枠を超えた」人間になることを望んでいる。家庭における継承語教育の実践やコミュニティに参加して同じ境遇の子供たちと日本語に触れあう機会を提供することは子供が日韓の枠を超えよりグローバルな世界に飛び出し自由に生きる可能性を実現させるための活動の一步であると考えられる。